

高柳聡子著

## 『ロシアの女性誌—時代を映す女たち』(群像社、2018年)

*Roshia no joseishi: jidai o utsusu onnatachi (Women's Magazines in Russia: Women Reflecting the Eras). By Takayanagi Satoko. Gunzōsha, 2018.*

インターネットの発達により、日本にいながらにして、洋雑誌も容易に手に入れることができるようになった。しかし、海外の女性誌と聞いて、多くの人々が真っ先に思い浮かべるのは、アメリカやイギリス、あるいはフランスなどの女性誌ではないかと思われる。日本では、誰もが学校時代に必ず学ぶ英語と比べて、ロシア語を学習する人自体が少ない。ロシア語に対する言語的な壁もあって、一般にはあまり知られていないロシアの女性雑誌の誕生から現在に至るまでのあゆみが、本書ではわかりやすくまとめられている。

ロシアにおいても、女性雑誌の誕生の背景には、近代化にともなう印刷技術の向上や出版事業の商業化、そして、女子教育の普及があった。教育を受けることによって、女性の識字率が向上し、読み書きを覚えた女性たちを対象に、女性向けの雑誌が創刊されるようになる。最初は一部の上流階級出身の女性たちに向けて始まった女子教育の裾野が、少しずつ広がっていく中で、教育を受けた女性たちが、雑誌の読者となっていく。日本における女子教育の普及と女性読者の成立の歴史的経緯をふりかえっても、明治期以降、同じようなプロセスの中で、女性雑誌が誕生していることが思い起こされた。ロシアの女性誌の黎明期を概観することによって、女性雑誌というメディアは、女子教育の発展とセットになった近代の産物であることが再認識される。

18世紀後半、近代化の進展と共に生まれたロシアの女性誌が、本格的に情報

メディアとして広まっていくのは19世紀以降である。ひとくちに女性誌といっても、様々なタイプがある。文芸色の強い教養雑誌と既婚女性の間で人気のあった家事全般からファッション、手芸などをテーマにした雑誌の二つに大別される。この点についても、明治・大正期の日本の女性誌との類似点として興味深い。前者からは、文学や歴史に興味のある知的好奇心の高い女性読者層の存在が伺える。また、家事や手芸、ファッションという現代の女性雑誌にも通じる内容を盛り込んだ雑誌が、既婚女性たちの間で根強い人気だったという指摘からは、当時のロシア社会においても、家庭こそが居場所となる主婦が誕生していたことがわかる。

20世紀に入ると、男女同権の確立を目指した政治活動の一環として刊行された雑誌など政治色の強い女性誌も登場する。こうした動向からは、雑誌メディアを媒介に、後に第一波フェミニズムと呼ばれる欧米の参政権獲得運動を中心とする女性解放運動が、ロシアの女性たちにも影響を与えていたことが読み取れる。

主婦向けの大衆的な女性誌は、資本主義の発達を背景に、性別役割分業を基盤とする近代社会に適合するジェンダー規範形成に寄与していたといえよう。一方で、読者層は限られていたとしても、フェミニズム的なメッセージが込められた女性誌は、近代社会の主役ともいえる「市民」には実は女性は含まれていないことを暴き出し、女性の政治的・社会的権利獲得を目指した活動の中で、読者をつなぐ役割を果たしていたといえる。ロシアの女性誌のこのような出版状況を通して、女性にとっての近代には、二つの側面があることを改めて確認することができる。ひとつには主婦化の進行である。そしてもうひとつは、自由や平等を理念に掲げながらそれは所詮、男性中心主義的な視点に立ったものにすぎないという近代の欺瞞性に意義申し立てをするフェミニズムを生み出したことである。

情報伝達手段が、現代ほど発達していなかった近代ロシア社会において、女性誌は、最新流行のファッションからフェミニズム思想に至るまで、ヨーロッ

パの様々な情報をロシアの女性たちに届ける貴重なメディアであった。女性誌を通じたヨーロッパ文化の受容のされ方からは、帝政下におけるロシアとヨーロッパの文化的距離や関係性についても考えさせられた。

短命に終わった雑誌も多かったとはいえ、19世紀以降に花開いたロシアの女性誌文化は、2014年に創刊100周年を迎えた『労働婦人』を除き、ロシア革命を機に姿を消すこととなる。ソヴィエト時代になると、女性誌の出版も国家の統制下に置かれる。共産党機関紙の出版局から発行されていた『労働婦人』と『農業婦人』は、プロパガンダとしての役割を担っていたことが物語るように、ソ連時代の女性誌は、アメリカをはじめとする資本主義の国々とは異なる様相を呈することとなる。帝政から社会主義国家へという社会体制の大転換は、女性の生き方や働き方にもドラスティックな変化をもたらした。女性誌の記事を通して、家事や育児は外部化し、男性と共に工場や農場で生産労働に従事することこそ、解放された女性であり、ソヴィエトにおける理想の女性像として賞賛された。ソヴィエト時代初期、「家庭からの女性の解放」というスローガンの下、家事と家族のケアを公共化することによって、女性たちも労働力として生産現場に動員されていった。国民がひとしく労働力として期待される社会主義体制において、ケア役割を集団に委ねることを突き詰めていった時、家族という私的領域はどのような意味を持つのだろうかと考えずにはいられなくなる。

第二次世界大戦後も、女性たちは建設現場や道路工事など、男性の領域とされるような職業や職域へ進出を続けていった。一方で、ソ連当局は、子育てを母親として女性たちの手に任せることへと方針を転換する。労働者として生産労働に励むと同時に、家庭においては、次代のソヴィエトを担う子どもたちを健全に育てるための再生産労働が、女性に対してのみ求められるようになる。女性が働くという点において、西側諸国の女性たちの目には、働くこと自体がもはやあたりまえとされるソヴィエト女性の労働環境は進んでいるように見えた。しかし現実には、ソヴィエトの女性たちは、「男は仕事、女は仕事と家事・育児」という二重負担の中で疲れきっていた。

ペレストロイカ期になると、党公認の女性誌においてさえ、長時間労働や肉体労働によって疲弊した女性たちの姿は隠蔽されることなく、むしろ問題化されている。プロパガンダの役割を担うはずの女性誌において、女性を男性と同等の労働力とみなすことをやめ、女性を重労働から解放せよという訴えが公然となされている。一律に女性も男性と同じように労働に従事することを当然としつつ、家庭という私的領域における男性のケア役割を不問に付してきたことによって生じたソ連社会の矛盾が読み取れ、非常に興味深い。ソ連のような社会主義体制における男女平等とは、どのようにして実現可能だったのだろうかという根本的な問いは、時代と社会体制を越えて、共働きが当たり前となりつつある現代の日本社会が抱える「ワーク・ライフ・バランス」や近年の「女性活躍推進」をめぐる課題とも、地続きであるように感じられた。

1991年末、ソヴィエト連邦が崩壊し、社会主義から資本主義へと再び社会体制が大きく変化する。この混乱期に、欧米の出版社がこれまで未開拓であった巨大なマーケットを求めてロシアの女性誌業界に参入してくる。新興財閥の富裕層の女性たちや都市部のエリート女性たちをターゲットに、欧米の高級ブランドやファッションについての最新情報を満載した『コスモポリタン』（1994年）や『マリ・クレール』（1997年）、『ヴォーグ』（1998年）といった西側諸国の女性誌が新生ロシアでも相次いで出版された。長い歴史を持つ『労働婦人』もソ連崩壊後は、タイトルこそ、そのままだが、政治色を排した主婦向け雑誌としてリニューアルされた。世代やライフスタイルなどによって女性誌が細分化されている現在の状況は、日本と共通する点である。それぞれの雑誌の読者層にあわせて提示されるテーマやファッションからは、ロシアの女性たちもグローバル化した消費社会の担い手となっていることが伺える。

日本では、M字カーブの底は年々浅くなってきているとはいえ、働き方の内実に目を向ければ、女性間でも雇用格差が広がっている。こうした日本の状況をふまえた上で、さらに言えば、資本主義経済がロシア社会に浸透していく過程で、男女格差や地域格差なども複合的に絡み合いながら、ロシアにおいて

も女性間の経済的な面も含めた様々な格差が拡大しているようなことはないの  
だろうかという点にまで思い及ばされた。

ロシアの女性誌にとどまらず、現代のロシア社会におけるジェンダー問題に  
まで読み手の興味・関心を広げる一冊である。